

世界に出遅れた日本を直視



月尾 嘉男

社会の理解は視点によって相違する。どの視点から対象を観察するかが結果の大半を決定する。年配の人間は過去の栄光の残像が邪魔をして日本がデジタル時代の潮流に出遅れている現実を軽視する傾向にあるが、世界の実情を認識し転換する必要がある。大鷲のような高空から世界を俯瞰する視点が必要だ。

江戸時代後期を代表する浮世絵師の歌川広重は初期には役者絵や美人画が得意であったが、晩期には風景画の傑作を制作している。

まず人気となったのは天保四年から翌年にかけて刊行された「東海道五十三次」で大変な評判となって二万枚以上が印刷された。その人気が後押しし、逝去直前の幕末に手掛けたのが「名所江戸百景」である。

これは江戸の風景を描写した119枚の組物であるが、特徴は大胆な視点の設定で、かなりの枚数が上空からの俯瞰で描写されている。一例として「両国花火」は地上から見上げた花火ではなく上空から見下ろした光景であるし、「深川洲崎十万坪」は上空を飛翔する大鷲の視点から眼下の

湿地と遠方の筑波山を描写し、新鮮な光景を提供している。

ここまで情報社会に関係なさそうな浮世絵の話題を紹介したのは、社会の理解は視点によって大幅に相違することを説明する前置きである。アメリカのコンピュータ学者A・ケイに「物事を観察する視点はIQ80に相当する」という名言がある。どのような視点から対象を観察するかが結果の大半を決定しているという意味である。

一例を紹介する。2004年に富山県が発行した「環日本海諸国図」という地図がある。一般の地図のように北が上ではなく、これは上を東、下を西、左を北、右を西と一般の地図を90度回転させ、中

央に日本海が位置する構図になっている。この地図からは日本が中国、朝鮮半島、ロシアとどのような関係にあるかが明確に理解できる。

日本だけではないが、世界の大半の国々は男性中心社会を構築してきたが、急速に男女平等、あるいは女性主導の社会に転換している。この視点からも日本は出遅れている。世界経済フォーラムによる「男女格差報告(2025)」は教育、健康、政治、経済について男女平等の程度を比較しているが、日本は148カ国中118位である。

日本は貧富の格差が少数の国家という漠然とした評価が流布してきた。しかし貧富の格差を計算するジニ係数(2023)では日

本は30位であり、男女の格差を表示するジェンダーギャップ指数(2025)でも118位である。比較するのには異論があるにしても、アジアでは韓国(101位)や中国(103位)よりも下位である。

そして本紙が主題としている情報社会での国力を評価する「世界デジタル競争力」の順位は、スイスの調査機関が最初に発表した2013年には20位であったが、年毎に順位が低下して昨年は30位まで下落している。参考として、アジアではシンガポール(3位)、香港(4位)、台湾(10位)、中国(12位)、韓国(15位)が上位にある。

「ゆでガエル現象」という言葉があるが、人間も緩慢な変化には鈍感である。年配の人間は栄光の1990年代から2000年代の残像が邪魔をして日本がデジタル時代の潮流に出遅れている現実を軽視する傾向にあるが、世界の実情を認識し転換する必要がある。そのためには大鷲のような高空から世界を俯瞰する視点が必要である。

つきお・よしお 1942年生まれ。東京大学工学部卒業、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授。